Osaka University Knowledge Archive

Title	<書評>バウハウス　1919-1933 ハンス・マリア・ウイングラー編　1962年
Author(s)	宮島, 久雄
Citation	デザイン理論. 1964, 3, p. 74-77
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52454
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

書　評

バウハウス　1919—1933

ハンス・マリア・ウイングラー編　1962年

Das Bauhaus 1919—1933 Weimar Dessau Berlin,
herausgegeben von Hans M. Wingler,
Verlag Gebr. Rasch & Co. und M. DuMont Schauberg, 1962. pp. 556

宮　島　久　雄

バウハウスの記録集は，この本が発行されて，3冊となった。それらをあげれば，

Bauhaus 1919—1923　(1923年刊)

Bauhaus 1919—1928　(1938年 第1版，1952年 第2版，1955年第3版ドイツ語版のみ販売されている，英語版は絶版)

Das Bauhaus 1919—1933　(1963年)

である。仮に上から第1の記録，第2の記録，第3の記録とよぶ。一見してわかることは，あとになるほど記録されている年数が長くなっていることである。バウハウスは，1919年に開校し，1933年に閉鎖されたのであるから，第3の記録で年代的には完全に一冊に収められたわけである。第1の記録は，1923年7月から9月にかけて開かれたバウハウス展にちなんで発行されたもので，初期のバウハウスの思想，教育内容を表明したグロピウスの宣言文を初め，各工房の作品が写真で記録され，初期の様子をよく伝えている。第2の記録は，1938年ニューヨークの近代美術館で催されたバウハウス展を機会にまとめられたもので，諸事情により1928年までではあったが，デッサウ時代のものもよく

記録されている。第1の記録にのせられたグロピウスの宣言も再録され，手に入りにくい第1の記録をも兼ねて，第3の記録が発行されるまでは，バウハウスを語るときに不可欠の資料となっていた。それに対して，今回あらたに発行された第3の記録は，編者が東西の両ドイツをはじめ，スイス，アメリカから，日記や手紙まで集めて，バウハウス・アルヒーフをつくり，その一部を本の形式にまとめたものであって，このような出版はほめられてよい。恐らく現在のぞみうる最大限の活動記録であろう。けれども，この第3の記録は資料としてよく集められたというだけではない。編者は，「バウハウスはひとつの理念（イデー）であった」というミース・ファン・デル・ローエの意見を，資料によって実証しようとしている。バウハウス校史を精神史として扱うための基礎資料を記録しているのである。この点でこの第3の記録は，前二者とはっきり異なる。第1の記録は，これからやろうとする意見の宣言でもあった。第2の記録には，編者たち（グロピウス夫妻，バイヤー）の自分たちの時代に対する回顧録といった気分があふれている。第3の記録になってはじめて，第三者による編集が行なわれることになったのである。さて，第三の記録には，

1. バウハウス前史
2. ワイマール時代：創立から23年展まで
3. 〃　：23年展から閉鎖まで
4. デッサウへの移転
5. デッサウ時代：グロピウスの時代
6. 〃　：マイヤーの時代
7. 〃　：デル・ローエの時代
8. ベルリン時代：私立学校—弾圧と閉鎖
9. 回　顧

（写真による記録は回顧の中へ入る）

以上の年代別でいろいろな文書が配列されている。旧美術学校系の教授達の

反対策動，工芸界からの反対運動，生産工房をめぐるイッテンとグロピウスの対立，政府議会を通じた右翼の干渉，オランダのデ・スティールとの接触など内外の事件を通じて，「芸術と技術の統一」「工業への接近」の確信をますます強めたグロピウス，右翼の干渉と生産工房などの経営上の失敗によるワイマール時代の閉鎖，デッサウ市長の支持の上での再出発，ブロイヤー，バイヤーなどワイマール時代の学生の協力による本格的なデザイン大学としての整備，活発な工房活動，軌道にのったバウハウス経営とグロピウスの突然の辞職，グロピウスの方針をもっと社会経済的に押し進めようとする二代目学長マイヤー，右翼の干渉によって突然マイヤーを解雇した市長，右翼の干渉がますます露骨になった三代目学長ローエの時代などの記録は，小説を読むような魅力を持っている。編者はこのような記録の配列によって，いかにしてグロピウスのデザイン理念は生長していったか，そのデザイン理念がグロピウス以後どうして発展できなかったか，発展どころかどうして維持さえできなかったかを明らかにしようとしている。編者は記録集というかたちで，それの外的な事情だけでなく，内的な事情さえ解明している。より正確に言えば，バウハウスのデザイン理念の形成を読者に外的な事情と内的な事情との絡みあいの中に求めさせようとするのである。

いずれにせよ，バウハウス研究はこの第3の記録の発行によって，より正確になるだろう。単なる回顧的に眺められていたバウハウスが，新しく解釈しなおされることによってずっとわれわれに近いものとなるだろう。それは反面からいえば，バウハウスの理念そのままでは現在にあてはまらなくなったことを物語ってもいる。バウハウスは，われわれによって解釈しなおされてはじめて，生きたものになることをこの本は示しているのである。

(注)

第1の記録の正式の書名と発行所：

Staatliches Bauhaus in Weimar 1919—1923, Bauhausverlag, Weimar-

München, 1923, pp. 226, タイポグラフイー, Moholy=Nagy, 装釘 Bayer, 絶版 第2の記録の正式の書名と発行所：

Bauhaus 1919—1928, herausgegeben von Herbert Bayer, Walter und Ise Gropius, 第1版 New York 1938, The Museum of Modern Art, 第2版 Charles T. Branford Comp. Boston 1952, 第3版 Verlag Gerd Hatje, Stuttgart 1955, pp. 230

第3版のドイツ語版をのぞいてあとは絶版。

執筆者紹介 (順不同)

渡辺敏雄	安井建築設計事務所第三設計部
米満知足	川崎車輛車輛設計部
土居一夫	三井造船玉野造船所船舶設計部
村上憲司	帝塚山学院短期大学
宮島久雄	京都市立日吉ケ丘高校